モラルサイエンス研究会（令和２年 12 月２日）講演要旨

近世天皇の宸翰に見る宮廷の実像

伝統文化研究室
客員教授　所　功

広池博士は明治二十六年（一八九三）京都で『皇室野史』を出版して以来、「皇室研究」を終生の課題とされた。この『皇室野史』は、朝廷が武家に抑圧された中世～近世を対象として、そのような受難時代の皇室と国民の関係を解明された意義は大きい。

その全容を伝統文化研究室員で丹念に検討し注解に取り組みたいと考えている。それに先立ち、帝国学士院編『宸翰英華』を精読し、とくに近年私的に入手できた三天皇の宸翰御消息を解読しながら、江戸時代における宮廷の実像を理解することに努めている。

その一つは、後水尾天皇が徳川和子（東福門院）を中宮（皇后）として迎えるに際し、苦慮の衷情を皇弟の近衛信尋に伝えられたもの、及び同上皇が皇子の後光明天皇に示された切実な御教訓書三通（『宸翰英華』所収）である。

二つ目は、東福門院所生の明正女帝が、二十歳で譲位後に帰依された山科十禅寺僧「かうぎよく」に宛てられた御消息である。三つ目は、史上八方目の女帝後桜町天皇が、上皇として後見された欣子内親王（のち光格天皇中宮）の「深曽木」（ふかそぎ）の儀に際し、摂政九条尚実に宛てられた御消息である。

いずれも見事な筆跡であり、その内容から複雑な朝幕関係や女帝の細やかな御心づかいなどを窺うことができる。それらを通して、戦国時代に衰退した朝儀が復興され、また宮廷文化が公家だけでなく武家・庶民の手本にもなったことを窺うこともできる。